

読者だより

取り組む心を
教えてもらった師

このところ自然災害が多発し、昨年六月の大阪北部地震、七月西日本豪雨、九月四日台風二十四号、六日北海道胆振東部地震と大きな災害が起る度、被災された方には心よりお気の毒と思つてきました。

困った時に人間の真価が出る、と言われますが、ある人の出会いで建設人としての生き様を学びました。

一九七〇年、社会人となり住宅会社に勤務。八年後の宮城県沖地震で初めて自然災害と関わり、以降災害発生の度に被災地で住宅の被災調査、被災住宅の復旧に携わってきました。取り組む時間が長かつたのが一九九五年一月発生の阪神大震災。地震発生の翌日から、同年九月末

まで、調査と復旧に関わった折、工を考えました。

今でも忘れないのは型枠。通常はコンパネを使って型枠大工が組んでいく。被災地ではブ

神戸は傾斜地が多く石垣が壊れて傾いた住宅には石垣まで含めた修復が必要でしたが、多くの時間は掛けられない。手ごわい被災現場へは今井さんに同行して頂き、修復工事のアドバイスを受けました。この家の新築時の費用はと聴かれ、なんですかと尋ねると、正攻法で考えると高額になり、オーナーさんはびっくりして直せなくなるのではないか。新築費用の三分の一

ぐらいなら直す気になるかなと思うとの返事でした。これを聴くまで被災邸の修復費用は積み重ね原価でやむを得ない。二〇〇〇万円で新築した家の修復に、二〇〇〇万円の修復費も疑問を持たなかつたが、この人はこんな事を考える人なのだと知り、その後は新築時二〇〇〇万円の家の修復を七〇〇万円程度の施

(仮称)構造物修復工法研究会の設立と会員募集のご案内

被災地は野戦病院のようなもの。豊かな経験と工学的知識を併せ持つ人が活躍するか否かで舞台が一変する事を痛感しました。当時の私は経験乏しく、これは野戦病院で看護師にもなれない。今井さんの様な考え方を持つ人を心の師とし、尊敬もし、非常時に限った事ばかりではなく、現在の日常でも

工考いました。
助けられたのが当時の太洋基礎工業株今井金次社長です。

工考いました。

工考いました。